「マリアの賛歌」（ルカによる福音書一章三九～五六節）

1　マリアの旅

アドベントからクリスマスへ、この一ヶ月あまり、私どもはルカによる福音書第一章とともに歩んできました。

この第一章に書かれているのは、イエスの生まれる少し前のことです。後の洗礼者ヨハネの誕生にまつわるエピソード、またそれと、イエスの誕生との関係についてなどです。この部分は、他の福音書にはない、独自の記述です。もちろん創作などではありません。

それにしてもルカがイエスをイエスの生まれる前にさかのぼって書き始めたということ、それはなぜでしょうか。ルカは大きな神の救いの歴史を見ているからとさし当たり言っていいと思います。イエスは、宣教を始めてから、その注目すべき活動によってメシアとなった、救い主にまで上り詰めたというのではありません。生まれる前から、はじめからメシアです。主なる神が、御心に基づき、「時の満ちるに及んで」（ガラテヤ四・四）御子を世に遣わされたのです。そのことがこうした書き方に表れています。

もう一つ、こういうこともあるかも知れません。それは私どももそうですが、やっぱり自分が生まれた時は、どうだったか、だれもが関心のあることです。洗礼者ヨハネも、ナザレのイエスも、人間的に推測すれば、そうしたことを聞かされて育ったと思います。そうしたことも、自分は何者なのか、深く悟るきっかけになったのではないかと思うのです。

ヨハネとイエスの生まれるいきさつをルカは書いた、後世に伝えた、私どものイエス理解、引いては信仰の理解に、大いに役立つものです。この箇所にしかないことですから、丁寧に私どもも読む必要があります。

先週私どもは、いわゆる受胎告知のところを読みました。そこから今日の箇所まで一つづきです。

身ごもって男の子を産むという天使のお告げは、マリアにとって戸惑い、思い悩み、恐れ以外の何ものでもありませんでした。あなたは神から恵みをいただいたのだ（三〇節）と言われても、マリアにはとても、すぐに受け入れることなどできなかったのです、そしてそのとき天使が、引き合いに出したのは、マリアの親戚でもある、洗礼者ヨハネの母エリサベトのことでした。

このエリサベトは不妊で、しかも年をとっていた、にもかかわらず、近頃、身ごもった。それは神がそのようにしてくださったのだ、神にできないことは何一つない（三七節）。これがマリアに対する天使の励ましの言葉でありました。じっさいこの言葉に励まされてマリアは、天使ガブリエルのお告げを受け入れるのです。マリアの信仰です。

天使は去って行きます。その後のことを今日の聖書箇所は伝えています。マリアはエリサベトを訪問するため、出かけて行きます。

そのころ、マリアは出かけて、急いで山里に向かい、ユダの町に行った。そして

ザカリヤの家に入って、エリサベトに挨拶した（三九～四〇節）。

「そのころ」というのは少し曖昧ですが、天使がエリサベトの懐妊を告げて去って行ってから、おそらく間を置かず、すぐに、です。

「山里に向かい」「ユダの町に行った」。これは、同じ第一章の後のほうに「ユダヤの山里」（六五節）とあるので、だいたいの地域は分かります。当時祭司は、務めはエルサレム、住まいは郊外の山里にあったようです。ただ問題はマリアのいるガリラヤのナザレとユダヤは相当離れていたということです。聖書地図で見ても七、八〇キロあります。簡単に「出かけて」行くというようなところではありません。これは旅です。自分も身重になることを予告されたマリアにとって大変な旅であっただろうと思います。

しかも彼女は「急いで」行ったのです。「急いで」という言葉が、イエス誕生の物語で、もう一回出てきます。救い主誕生の知らせを野原で聞いた羊飼いたちが、それを見てこようと言って、出かけるときです。両方とも、神を賛美する、ひじょうに純粋な思いを示す印象深い言葉です。マリアは、エリサベトの喜びを知って、それを共にしようとして、矢も盾もたまらず出かけたのです。そこには、自分に対する天使のお告げについて、年長のエリサベトに事態を打ち明け、意見を求める、相談するという意図もマリアにあったことは、想像に難くありません。「エリサベトに挨拶した」とあります。まことに奇跡的な懐妊を聞いて、お祝いを述べ、ともに神を賛美するためでありました。

マリアがはるばるエリサベトを訪ねる、これも聖書のイエス誕生物語の美しい一場面です。

2　祝福の言葉

ルカによる福音書第一章には、洗礼者ヨハネとイエスの誕生予告、そしてそれぞれの家族、それらが絡まり合って描かれています。今日の箇所で、二人の女性、マリアとエリサベトにおいて、二つのかたまりが出会います。第一章のクライマックスと言ってよいかも知れません。

出会いの場面、訪ねて行ったのはマリアです。しかしマリアの挨拶を受けて、むしろ言葉を費やして祝福の言葉を語ったのはエリサベトであり、その合図をしたのは彼女のお腹の子でした。

> マリアの挨拶をエリサベトが聞いたとき、その胎内の子がおどった。エリサベトは聖霊に満たされて、声高らかに言った。「あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。わたしの主のお母さまがわたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしょう。あなたの挨拶のお声をわたしが耳にしたとき、胎内の子は喜んでおどりました。主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いでしょう」（四一～四五節）。

いま、言葉を費やして祝福の言葉を語ったのはエリサベトであり、お腹の子はその

合図をしたと申しました。その通りです。

じっさい詳しく見ると、マリアの挨拶に最初に反応したのは、エリサベトではなくて、お腹の子のほうでした。「マリアの挨拶をエリサベトが聞いたとき、その胎内の子がおどった」。「胎内の子」とは洗礼者ヨハネのことです。「すでに母の胎にいるときから聖霊に満たされていた」（一五節）ヨハネは、「おどる」ことで救い主イエスを証しするのです。それに気がついて、気がつくのも聖霊の働きと言わねばなりませんが、エリサベトだけが気づくことのできたことに気がついて、今度は彼女自身が、マリアに祝福の言葉を述べるのです。ヨハネが胎内でおどって知らせたことを言葉に出すのです。

エリサベトの祝福の言葉にも私どもは注意したいと思います。エリサベトの言葉、「わたしの主のお母さまがわたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしょう」にしても、「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いでしょう」にしても、マリアの幸いを、あるいはマリアの信仰をたたえていると言っていいと思います。私どもも、先週、マリアの信仰ということを、こころ新しく聞いたところでした。

しかしそれより、もっと大切なことは、エリサベトが、マリアからやがて生まれてくる者を、すでに「主」として認識しているということではないでしょうか。イエスは後から主になったのではなくて、はじめから主なのです。主、すなわち、私どもを救い、私どもを治め、やがて私どもすべての者を主の民としてくださる神です。イエスは主なり、この方以外にわれらの救いはない、という初代教会の信仰の告白は、すでにエリサベトの口においても明らかにされているのです（ローマ一〇・九、第一コリ一二・三）。

福音書には福音が書いてあります。以前申し上げた通りです。福音とはイエスその方です。イエスは一人の女から生まれた人の子です。しかしまた聖霊によって宿った神の子です。福音書は、むろんルカによる福音書も、たんに一人の人間の生涯を書いているのではありません。イエスをメシアとして、つまりキリストとして書いているのです。主イエスを書いているのです。

3　マリアの賛歌

さてエリサベトの祝福の言葉を聞いたマリアは口を開き、主なる神の恵みに応え賛美の歌を語り始めます。

マグニフィカートという呼び名で知られるマリアの賛歌です。マグニフィカートという言葉は、ラテン語のマリアの賛歌の最初の単語です。「あがめる」という意味です。「あがめます、わたしの魂は、主を」（四七節）となります（讃美歌一七五～一七九を見よ）。

一連の出来事が賛美で締めくくられる。聖書が昔から取ってきた手法です。いまは例を挙げることをしません。私どもも教会でしていることだからです。賛美をして締めくくる、じっさい神のわざに出会い、それを深く心に刻むなら、そうならざるをえないのではないでしょうか。

受胎告知を受けてからのマリアを改めて振り返って見ます。身ごもって男の子を産

むという天使のお告げにマリアは戸惑い、考え込み、恐れます。しかし最後は、それを受け入れます。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身になりますように」。

そのようにして神の言葉を受け入れたマリアにエリサベトも祝福の言葉を語っています。主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方はなんと幸いなことか。マリアはそれを受けて、次のように歌います。

身分の低い、この主のはしためにも、目を留めてくださったからです。今から後、いつの世の人も、わたしを幸いな者と言うでしょう、力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから（四八～四九節）。

そしてつづけて次のように歌います。

主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます（五一～五三節）。

イスラエルの主なる神は、憐れみの神です。権力ある者たちを見過ごして、身分の低い者に目を注ぎたもう神です。富める者たちを見過ごして、飢えた、貧しい者たちのもとへと向かう神です。

そしてこのような神の在り方は、福音書が私どもに示すイエスの姿とそのまま重なります。イエスの誕生、クリスマス、それはそのような主なる神が人の姿をとって私どものあいだにお住まいになったということです（ヨハネ一・一四）。私ども人間のところへと来られて私どもと共に生きようとしたということです。それは私どもがこの方によって、神と共に生きることができるようになるためです。神のもとへと私どもが引き上げられるためです。神と共に生きる人間が誕生します（同一・一二）。そうです、イエスの誕生は、また私どもの誕生でもあるのです。

今日は、この後、一人の兄弟の洗礼式を行います。私どもは兄弟の新たな誕生に立ち会います。私どももまた、この兄弟と共に、もう一度生れ変わりたいと切に願うものです。

今年も、後一週間と少しを残すだけになりました。二〇二〇年はコロナに苦しめられた一年でした。しかしよく忍耐してここまで歩むことができたこと、皆様に、そして何より神に感謝するものです。

まさにコロナ禍の、今日はクリスマスです。私どもはこのクリスマスで何を聞き何を語るべきでしょうか。それはマリアが天使のお告げに戸惑い、思い悩み、恐れながらも、最後はしかし一切を神に委ねて歩んでいったその信仰です。〈しかし〉の信仰です。〈それでもなお〉の信仰です。

「しかし、勇気を出しなさい、わたしはすでに世に勝っている」（ヨハネ一六・三三）。このメッセージに聞きながら、神が用意してくださる新しい年へと歩みを進めてまいりましょう。

（二〇二〇・一二・二〇）